

「子どもの食生活と躰についての総合的研究」(2)

A general research on the child development on eating habits and teaching manners (2)

「終戦前後の一農村地域における食文化の規定要因と伝統的意義」

埼玉県秩父郡小鹿野町三田川地区における「老人を対象とした終戦前後の食生活調査」報告

茨木 竹二(Ⅳ), 川合 貞子(Ⅰ、2), 千田真規子(Ⅰ、1), 猪俣
美知子(Ⅲ、B、a), 斉藤 尚子(Ⅱ、Ⅲ、A), 武石 仁美(Ⅲ、C)
野崎千穂子(Ⅲ、B、b), 福田 啓子(Ⅴ), 村木由紀子(Ⅲ、D)

I. 食文化と子どもの躰に関する若干の 覚え書

調査結果の報告に入る前に、その結果をまとめる上で重要な「食文化」と「子どもの躰」について、概括的に触れておきたい。

1. 食文化の把握にむけて

1) 食法、食作法及び食形態

食文化の特徴は、料理と共食という人間が行う二つの文化的行為といえる¹⁾。

人間は他の動物と違い料理をする。食物を洗い、皮をむき、切り、加熱し、味をつける。道具を利用しおいしく食べられるようにし、きれいに盛りつけをする。この食法の場合が台所である。

人間は共食をする。共食は限りある食物を分かちあうことで、力のあるものが1人占めをしないようにルールがつくられ、食作法の起源となる。共食をする最も基本的な単位が家族である。かなり多くの社会で家族のシンボルとして竈が考えられているが、同じ火で焼いたり炊いたりした食物を一諸に食べるということで、食の分配ということからも家族を表している。共食を軸として展開する食行動が観察されるのは食卓である。

つまり、食文化の中心は台所と食卓に求められるし、また食形態は居住形態と強い関りをもつといえよう。

2) 炉と食文化

人間の生活の原点は炉であった。旧石器時代から狩猟と漁撈の獲物を焼いたり煮たり食べたことは、火焚場で行われた。火焚場の周囲に小さな集落をつくって生活していた²⁾。

縄文時代になると外にあった火焚場は、屋内にとり入れられて炉となった。草木の実、葉、根は生で食べるほか焼いたり、茹でたり、すりつぶしたりして食べたが、この時代はまだ肉食が主であり、1日の食事回数も不定で空腹になると食事をしていた。

縄文晩期に稲作農耕が始まり、弥生時代には米食を中心とする主食とおかずの食物(副食)に分離し、食生活に画期的な変化を与えた。米は土器で煮るほかに甑で蒸して(強飯)食べられるようになった。農耕作物が出現し、それが貯蔵できることにより、食事の計画性をもてるようになり、1日2回食になった。生活の場は竪穴住居で、中央に炉を切って周囲に家族がすわり、炉の火で煮炊きをし、又、暖をとったり、灯をともしていた。

古墳時代は、竪穴の一方の壁に竈を築き、その左右には貯蔵穴や土器置場をつくった。竈の火は炉の火にくらべ熱効率がよく、加熱調理は進歩をとげた。又、行竈という持ち運びのできる竈があった。豪族の家は高床式で台所は別棟を設ける分棟型となり、この様式は、南西諸島、伊豆諸島、愛知などにみられ、カマドヤとかナベヤなどといわれていた³⁾。これは、火の清浄を保とうとする意図から別棟にしたのかもしれない。

炉は、高床住居ができると、採暖、採光の意味からも床上にも設けられ、土間の炉(地床炉)に対して囲炉裏と呼び分けられた。囲炉裏はその周囲に集まる家族の人間関係を温める社会的役割をもち、さらに火の神として宗教的性格すら帯びていた。

囲炉裏の周囲には(地方によって呼び名が違うが)、おのおのの名称があり、そこへ座りうる人が決まっていた⁴⁾。上り口に一番遠い所が、ヨコザ、テイシュザといい畳が横に敷いてあり家長の座であった。その左右のうち表に近い所、南の方がキヤクザ、ミナミザといい来客の座で、その向い側がカカザ、オンナザといい主婦の座、ヨコザの向い側がキジリといい使用人の座であった。家族の地位、役割が明確になり、家長を中心とする一家の秩序を維持する根源的な機能をもつことになる。

囲炉裏の周囲では、日常生活の主要部分である食事が行われるが、1人用の膳を用いていた。古くは地面の上に直接、食器をおいて食事をしてしたが、やがて食器に脚をつけた高杯が縄文時代につくられた。弥生時代には低い脚のついた台、つまり机ができ、平安時代には、もう少し背が高くなり、貴族階級の宴会の時にはいくつかつなげて大きい食卓とした。このように何人かがとり囲んで食事をする食卓は、一般の人には使われなくなり、折敷、盤ができた。やがて折敷に足がつき木具膳となり、盤を大型にし、脚をつけたのが台盤となった。長台盤は長さ8尺、幅3尺もあり草摺という腰掛を用いた⁵⁾。近世になり、蝶足膳、猫足膳、宗和膳、箱膳な

どが使用され、身分によって使用する膳、食器などが決まっていた。

箱膳は初め禅堂で使われていたが、簡便であるため武家の奴僕、農民、商人、職人が広く使用するようになった。箱膳⁶⁾は正方形の蓋つきの箱形をし、箱の中に椀、皿、箸などの食器を収めておき、食事の時は、蓋を裏返しておき、取り出した食器をならべる。箱膳とその中の食器は使用者が決まっており、同じ家族のなかでも他の人が使うことはなかった。専用の食器には使用者の人格が投影されていて、他人が使用することによって不浄なものになるという観念があった。食事のあとは湯、茶を椀や皿にそそぎ、箱膳に入っている専用のふきんでぬぐうだけで、食器を洗う日は「ものび」の前などで月に何回もなかった。

明治20年頃から都市では1人用の膳(銘々膳)から数人で囲む座式の食卓(チャブ台)が普及しはじめた。銘々膳からチャブ台への移行は封建制の打破といえよう。一人一人膳にむかう食事は固苦しくなり、食事中に話をするのは不作法だといわれ黙々と食べるだけであった。一つのチャブ台を囲み、同じ内容の食事をとり、気楽に話ができるようになったが、農山村では第2次世界大戦後まで箱膳を使用していた地方も多い。銘々膳はハレの膳として本膳などの形で残った。

戦後の住宅は、ダイニングキッチン、リビングキッチンがつくられ、清潔なキッチンユニットが設備され、椅子式のダイニングテーブルがおかれるようになり、チャブ台を使用する家族は少なくなってきた。

3) 食形態の変容

歴史的な食形態の変化をみると、日本ほどこの1世紀の間で著しい変化を遂げた国はない。

食法に関することでは、日常の食事に、フランス、イタリア、中国をはじめ各国の料理が作られ、食材も外国からの野菜、果物、魚が登場し、肉も普通に食べるようになり、主食も米よりパンを好む傾向もでてきた。食卓も銘々膳か

らチャブ台、ダイニングテーブルとかわってきた。

食作法に関することでは、我国は銘々の膳に盛りつけられた食事が置かれる。つまり食の分配が徹底していたが、最近では、大皿に盛りつけられた料理をじか箸で自分の皿にとって食べる中国料理の食べ方に近くなり、西洋料理を食べる時はナイフ、フォークを使いこなすようになった。ヨーロッパの伝統的な食事の場合は、テーブルの上で肉を切ったりパンを切ったりして分配する。その役目は家長であった。日本では初めから盛りつけられていて、分配の役目は主婦であった。又、日本のお膳は低いので食器をもち上げなければ上手に食べられなかったが、ヨーロッパでは取手のついたカップ以外は皿をもち上げてはいけないことになっている。食器を手でもつことによって御飯や味噌汁の温かさを掌に感じながら食事をするという習慣は、日本人独特の味覚や感性を育てているように思われる。

参考文献

- 1) 石毛直道 「人間、たべもの、文化」
P.12 平凡社 1980年
- 2) 谷口歌子 「食と食空間」 P.23
雄山閣出版 1984年
- 3) 瀬川清子 「食生活の歴史」日本の食文化
大系第一巻 P.248 東京書房社 1984年
- 4) 柳田国男 「定本柳田国男集」第21巻
P.221~222 筑摩書房 1982年
- 5) 小泉和子 「週間朝日百科113世界の食べ
もの」 P.12-60~68 朝日新聞社 1983年
- 6) 石毛直道 「家と女性」 日本民族文化大
系10 P.169~171 小学館 1985年

2. いわゆる子どもの躰について

1) 躰とは

日常我々は「躰(しつけ)」ということばを頻繁に聞き、又使用している。その多くは挨拶、ことば使いなど日常生活に関連した内容についてであり、辞書に示されているように「礼儀作法

を身につけさせること。また身についた礼儀作法」(広辞苑)という狭義の意味に用いられることが多い。躰という文字自体、日本で作られたものであろうことは、「寺子屋で武士にふさわしい、上品なたちふるまいを授け、身構えを美しく保つという事から身躰に美というつくりが当てられた。」(柳田国男)という記述により察知される。また、着物の「しつけ糸」、あるいは、田に一定間隔をおいてきちんと植える「稲のしつけ」ということばに用いられている「しつけ」にみられるように、きちんとする、決った型におさめるという意味が非常に強く、discipline も又、訓練、鍛練、規律、秩序等の意味を持っている。

しかし、一見外面的な「型づけ」としての礼儀作法や行動を身につけることの背景には、その社会の歴史的な慣習や価値観、行動様式があり、外面的・形式的な躰の意味が内面化されてゆかなければならない。青井和夫氏は「個人がある特定の社会集団の生活様式を学習し、その集団の正規の成員にしあげられる過程」を「社会化」と呼ぶが、広義に解釈すれば、躰は社会化の1つの形態であると考えられよう。いわゆる所属する社会において1人前の社会人にしあげることであり、「日常生活における基本的な望ましい価値の習得と行動およびその習慣化の体得」が躰であり、中心的な課題である。したがって、躰は幼い子どもだけに限らず、社会が1人前の人間と認めるまで継続されるものである。

具体的な躰の内容には、それぞれの発達段階や発達課題に適合した事柄が相当しているが、乳児期から幼児期にかけては、まず生活にとって重要な食事、排泄、睡眠などのいわゆる生理的側面の内容が主となり、幼児期には乳児期の内容に清潔や衣服の着脱などを加えた基本的な生活習慣やことば、さらに社会生活における基本的な訓練という外面的態度矯正の内容を、児童期には善悪の判断など価値的・内面的躰が主となる。しかし、これはあくまでも主な

躰の内容であって、内面的躰が幼児期に全くないというのではなく、躰の主体者たる者は内面的意味を包含しながらも、子どもの発達特性との関わりで外面的躰を旨とするということであり、また、生理的、外面的、内面的な躰の一部は青年期までも引き続き行なわれる。いずれにしても、このような社会化という側面が強調される躰の根底には、子どもをいつくしみ、その成長発達を期待し、子ども自身の生きる力を信頼するおとな（親）の暖かい愛情と、子どもの親に対する信頼という相互関係の成立が何よりも重要であることは言うまでもない。これが欠落した躰は全く外見的なものにすぎず、子どもの人間的成長、自立を防げ、様々な問題を生むこととなり、躰の本質的な意味と明らかに異なる。

2) 伝統的躰について

工業化が進展するまでの日本社会においては、多くが農林水産業を中心とした生産に従事し、共同体（ムラ）における共同生活が軸となって生活が営まれていた。したがって、子どもの躰も「イエ」単位のみにおいてされたのではなく、ムラの一員と成るべく、そこに共通する生産における慣行、儀礼などの行動様式や思考様式を身につけることが躰の中心課題であり、自分の属するムラの躰を多く受けていたのである。

秩父地方では「7歳までは神の子」、15才までを「村の子」、15才以上になると一人前の「村の人」と言われており、このことは当時子どもの存在をどうとらえていたかについて興味深い示唆を与えてくれる。すなわち、集団の一員としての子ども、社会的存在としての個というとらえ方が明確に示されている。

一方「7歳までは神の子」とは、秩父地方以外でも広く言われてきているが、乳幼児期の死亡率の高い時代であり、誕生した子どもが生産の担手と成り得るまで成育できる保障はなく、そういう意味からはムラの一員として認められるのが7歳以降になったのであろう。一人の人格を有した者とはみなされず、魂が十分安定しないが

故にツミもケガレもない子として、自然の力に子どもの育ちをまかせ、親は子どもの生命を祈り、手助ける気持が強かったようである。したがって躰もゆるやかで、子どもは大らかに育てられたようである。

躰は社会化の一形態であると前述したが、その社会化には意図的な社会化、すなわち教育的な躰と、無意図的な社会化、すなわち主に観察学習による躰がある。伝統的な子どもの躰の特徴は、無意図的な躰にある。すなわち、家族の中においては祖父母、父母、兄弟を、また、ムラにおいては子ども組や若者組など年令に応じた集団に参加することで、まわりの人の行動様式、思考様式を見よう見まねで自然に身につけ、ムラの構成員の一人としての自己を確立していたことにある。

3) 食の躰について

食することは人間の最も基本的な生理活動の1つであると同時に、自身の生命を維持することの感謝や生きる意志の根源となる精神的意義を持つことは昨年度の報告に述べられているとおりである。食することの満足感、充足感はまさに快の感情を伴う事柄であり、快の感情を伴った躰こそ豊かな人格形成にとって重要である。具体的な食前後のあいさつ、作法、偏食、食事の自立など、子ども時代には外面的躰が多いが、やがてその型を通して人間の食べるということの持つ宗教的、文化的意味を内面化してゆくのである。身体的健康、身辺自立と同時に、日常欠くことのできない食を通して、人間が生きること、社会と共に、自然と共に在ることが認識されることも食の躰の重要な一面である。

また、誕生100日目の「お食い初め」、満1才の「ムカイドキ」「ムカワリ」の時の誕生餅や誕生前に歩き出した子どもに一升餅を背負わせたり踏ませたりするいわゆる通過儀礼における食のしきたりは、食の躰とは直接深い関わりはないが、子どもの成長を祝い願うものとして、食の精神的、伝統的文化を示して興味深い。

参考文献

- 1) 「定体柳田国男」第29巻 筑摩書房
- 2) 青井秋夫他 「現代家族の親子関係」 培風館
- 3) 我妻洋 原ひろ子 「しつけ」 弘文堂
- 4) 姫田忠義 「子育ての民俗をたずねて」 柏樹社
- 5) 坪井洋文他 「家と女性」 = 暮らしの文化史 = 日本民俗文化大系 第10巻 小学館

II 調査の概要

1. 現地調査の概要

目的：本プロジェクトにおける一方の目的である、過去の食生活の規定要因を地域事例によって明らかにするとともに、そこにおける子どもの躰を手がかりに食文化の伝統的意義への遡源を試みること。

時期：第一回 昭和59年11月22日(木)～24日(土)

第二回 昭和59年12月21日(金)～23日(日)

方法：調査員の戸別訪問による面接調査

調査項目：

- A 基本的属性（年齢、就業状況、職場、学歴、家族構成、住居、部屋数）
- B 食形態（食作法－食事場所、食卓、座席、食器、箸箱・箱膳の使用、食事時間・回数、所要時間、用意とあと片付け、食法－調理時間、献立、外食）
- C 子どもの食行動（食事内容・時間、準備やあと片付けの手伝い、食事の際の注意、好き嫌い、箸の持ち方、躰の主体）
- D 食習慣（行事食とその意味・由来、神棚や仏壇、供物とその手伝い、食事にまつわる故事）

対象者：78名（女性）

三田川第2～4老人クラブ会長の協力ののもとに無作為抽出、ただしその際、健康上面接調査が可能であることを前提とした。

回収状況： $\frac{66 \text{ 回収数}}{78 \text{ 抽出数}}=85\%$

回収不能の内訳：留守－8、拒否－2、その他－2

集計：手集計による単純集計、実数が100を越えないため事例とし、実数で製表。

問題点：終戦前後の食生活となると対象者にとって現時点よりほぼ40年前にさかのぼることになるため、どうしても記憶が不鮮明であったり、またそれが印象の強弱に左右されていること、並びに前後の生活体験がある程度重複してしまうことなどが考えられる。

2. 対象地域の概況

1) 地勢

小鹿野町：

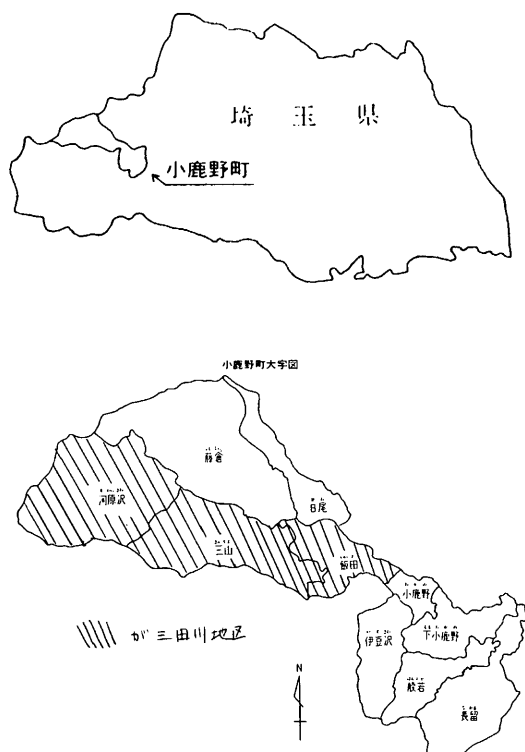
埼玉県西端部に位置し、秩父市街より国道299号線を北西に向かって約15km、南は荒川村と両神村、西は大滝村と群馬県上野村、北は吉田町、群馬県万場町・中里村に接している。標高は248m（町役場地点）、東西に20kmと細長い地域で、総面積は100.02km²である。平地はわずか15%程度で、市街地や集落は荒川支流の赤平川がつくる段丘上の平地を中心にして形成されている。経営耕地面積は田－99ha、畑－213ha、桑園－171ha、果樹園その他－26haの計509ha（S55. 2. 1 現在「農林業センサス」）。それ以外の約85%が山林原野となっている。昭和30年4月1日に旧小鹿野町と長若村が合併し、さらに翌31年3月31日に三田川村、倉尾村が合併して現在の小鹿野町が成立した。

三田川地区：

旧小鹿野町の北西端より、やはり国道299号線に沿って県の最西北端で群馬県境の志賀坂峠（標高876m）までの範囲に位置する。この地区のほぼ中央に流れる赤平川を縫うようにして国道がのびている。河原沢は北に二子山（標高1165.6m）、南に両神山（標高1723.5m）と高い山々に囲まれている。総面積は41.3km²、うち経営耕地面積は田－17ha、畑－59ha、桑園－31ha、果樹園その他－10haの計117ha（S55. 2. 1 現在「同上」）、約95%が山林原野となってい

る。明治22年4月1日に飯田村、三山村、河原沢村が合併して三田川村となる。

●位置図



2)歴史的概容

小鹿野町から出土する土器・石器は、縄文中期(約4000年～5000年前)のものが多く、それよりも古いものが出ていないことから、人間が住みはじめたのはこの頃からではないかとされている。もちろん当時の人口はわからない。ただし、最も古い遺跡としては「飯田地区の観音山の岩陰には、縄文草創期(約1万年前)の遺跡があるといわれている。」

古墳時代のものは、小鹿野・下小鹿野地区に数多く存在する。丸山塚古墳(直径30m、高さ5.1m)のように大きな古墳を築くためには、かなり多くの労働力を必要としたと推定される。

古墳の近くには集落があり、かなり多くの人々が住んでいたものと推定される。

「知知父の国造(くにのみやつこ)が置かれたのは崇神天皇の時代であるから、この地方に大和文化の移入が行なわれたのは、案外、古くからであったかもしれない」とされている。

現在「巨香郷」が小鹿野の古い地名と考えられているが、これは承平年間(931～937)に源順が編纂した『倭名類聚抄』に載せられている。

平将門に関する伝説が秩父地方には多いと言われるが、ここ小鹿野にもある。「勝負沢」の地名や、斬殺された将門の妃・十二御前の霊を慰めるために里人が作ったという「十二御前神社」。「小鹿神社は天慶の乱(将門との戦い)に大功があり、下野・武蔵両国の守となった藤原秀郷が、その氏神・春日の神を祭ったのである」とその縁起に記されてある。」

鎌倉・室町時代のすぐれた仏像も町内にはたくさん残っている。戦国時代の名残りとしては、武田氏と北条氏の接点となったこの町に、「軍平」、「法師落人」という地名があり、合戦のあったことをしのばせる。

江戸時代になると、町全体が幕府の直轄地(天領)となった。享保2年(1717)には代官所が廃止され、旗本の地行所となるが、上小鹿野村だけは、幕末に林肥後の所領となるまで御料所(天領)のままであった。

元禄二年正月(1689)「小鹿野寄場五人組人別帳」によれば、三田川地区には五人組が106組。約530戸、平均4人とすれば2120人と推定される。それ故当時は小鹿野地区よりも山間部である三田川地区の人口が多かったようである。

人口が記されている最古の文書は「般若村・村柄子明細書」(1654)で190軒756人。岩田家文書「宗門人別帳」(1665)には、上小鹿野村290軒1162人と記されており、平均家族員数を計算してみると、それぞれ3.9人、4.0人になる。

元禄七年(1694)の「五人組帳」他(岩田家文書)から推定した町の人口は、1788戸7120人程度で、三田川地区では505戸2020人程度とさ

とされる。

上記の宗門人別帳の中で最大の世帯は「名主太郎左衛門の家族10人、下男23、下女8、山守り3の計44人」で、これは特例である。

『新編武蔵風土記稿』（1810～1828編纂）には、当時の人々の生活の様子として、「農業の合い間に、男は薪炭、林産加工、女は養蚕、絹織りを生業としていた」と記されている。

江戸との交流もさかに行なわれた。小鹿野地区には、上・中・下の3宿があり六斎市も立った。現在も町内のあちらこちらの祭りで演じられている神楽・歌舞伎、春祭りに曳き回される屋台や笠鉾は、当時の繁栄ぶりを今日に伝えている。

3)人口・世帯の推移

明治に入り、17年の「県町村合併史」による人口と戸数は、町全体で1717戸9043人、三田川地区については461戸2622人である。平均世帯員数を計算すると、町全体では5.0人だが、小鹿野地区では4.0人、三田川地区では5.7人と市街地よりも多くなる。元禄七年から明治17年までの185年間に旧三田川村を始め山間部の人口は、著しい増減をみせていないのである。

大正9年になって初めての国勢調査が行なわれ、それ以後の人口と世帯数については表のとおりである。総人口を見ると特別に大きな変動

●人口と世帯数 II-2-3)表1

	世帯数	人 口			1世帯当 り 人 口
		男	女	総 数	
大正 9年	2,499	6,430	6,585	13,015	5.2
14年	3,043	6,626	6,812	13,438	4.4
昭和 5年	2,603	6,726	6,872	13,598	5.2
10年	2,542	6,658	6,882	13,540	5.2
15年	2,462	6,459	6,680	13,139	5.3
22年	2,729	7,083	7,718	14,801	5.4
25年	2,706	7,265	7,770	15,035	5.6
30年	2,690	7,106	7,645	14,751	5.5
35年	2,757	6,671	7,321	13,992	5.1
40年	2,767	6,290	6,897	13,187	4.8
45年	2,890	6,056	6,582	12,638	4.3
50年	3,129	6,241	6,527	12,768	4.1
55年	3,338	6,322	6,451	12,773	3.8
56年	3,317	6,504	6,547	13,051	3.9
57年	3,336	6,503	6,588	13,091	3.9
58年	3,430	6,483	6,621	13,104	3.8

資料：国勢調査 各年10月1日現在 「統計 おかの'84」より

は見られない。更に細かく見ると終戦後のS25年が15035人(平均5.6人)が最も多い。しかし「復員したすべての若者達の新規な職場」がなかった為、都市へ流出、農山村過疎化現象が起った。町では40年代入って工場誘致を始め、人口流出に歯止めをかけることに力を入れる。地区別にみても、長若・三田川・倉尾の山間部から小鹿野地区(市街地)への集中化現象がうかがえる。

●旧町村別世帯数と人口の推移 II-2-3)表2

地 区	小 鹿 野	長 若	三 田 川	倉 尾
面積 km ²	15.22	15.94	41.31	27.55
—	世 帯 人 口	世帯 人口	世帯 人口	世帯 人口
昭和30年	1,237 6,380	382 2,218	658 3,734	413 2,419
35	1,343 6,323	375 2,040	632 3,375	407 2,254
40	1,403 6,277	360 1,859	604 3,007	400 2,044
45	1,523 6,367	356 1,692	623 2,743	391 1,836
50	1,680 6,641	351 1,586	720 2,911	378 1,630
55	1,893 6,905	345 1,515	738 2,870	362 1,483
56	1,842 7,019	348 1,543	752 2,946	375 1,543
57	1,852 7,093	353 1,553	754 2,935	377 1,510
58	1,968 7,208	347 1,560	738 2,877	377 1,459

資料：

国勢調査 56, 57, 58年については住民登録人口「統計 おかの'84」より

世帯数だけに注目すれば35年から少しずつ増えているが、人口は50年まで減り続けている。25年に5.6人だった平均世帯員数も55年には3.8人となり、概ね核家族化してきたことが示されている。

55年から人口が非常にわずかず増え始めているが、核家族化していることに変化はない。

(S60. 2. 1 現在 13152人 3439世帯)

S43年10月に町民アンケートが行なわれ、その無作為抽出349人の回答を見ると「町に住んで何年」という質問に対し、(1)生まれた時から66.8%, (2)21年以上16.6%計83.4%あり、特に農山村部に定着性が強くみられたという。日本の総人口は、大正9年の時から2倍に増えた。都市によっては鉄道等の関係で何十倍にもふくれ上がった所もあるのに、小鹿野町はほとんど変わらない。特に三田川地区などの山間部では過疎化がみられるものの、元禄の時代からほぼ300年の長い間著しい増減はなかったといえる。

4)産業および農家戸数の推移

15歳以上の就業者数は、S35年から55年にかけて総数の著しい変化はないが、産業別になると大きく変わっている。第一次産業の就業者数

が35年には第1位で約60%だったが、55年には約20%となり3位になってしまう。第二次・三次産業が大きく伸び、特に第二次産業は35年に第3位20%弱だったが、45年には第三次産業を

●産業分類別15歳以上の就業者数

II-2-4)表1

区 分	昭 和 35 年			昭 和 40 年			昭 和 45 年			昭 和 50 年			昭 和 55 年			
	総 数	男	女	総 数	男	女	総 数	男	女	総 数	男	女	総 数	男	女	
合 計	6,747	3,735	3,012	6,332	3,593	2,739	6,701	3,646	3,055	6,280	3,754	2,526	6,256	3,860	2,396	
第 一 次 産 業	農 業	3,753	1,804	1,949	3,164	1,625	1,539	2,539	1,190	1,349	1,610	835	775	1,142	618	524
	林 業 狩 猟 業	164	144	20	113	100	13	67	55	12	44	43	1	49	48	1
	漁 業 水 産 養 殖 業	1	1	0	2	2	0	2	1	1	2	2	0	1	1	0
	小 計	3,918	1,949	1,969	3,279	1,727	1,552	2,608	1,246	1,362	1,656	880	776	1,192	667	525
第 二 次 産 業	鉱 業	33	32	1	38	38	0	56	56	0	64	63	1	31	30	1
	建 設 業	356	317	39	375	356	19	520	492	28	729	680	49	864	795	69
	製 造 業	875	471	404	948	471	477	1,626	753	873	1,774	884	890	1,856	933	923
	小 計	1,264	820	444	1,361	865	496	2,202	1,301	901	2,567	1,627	940	2,751	1,758	993
第 三 次 産 業	卸 売 小 売 業	670	381	289	728	397	331	794	425	369	782	430	352	864	489	375
	金 融 保 険 不 動 産	15	9	6	31	13	18	37	18	19	70	35	35	77	40	37
	運 輸 通 信 業	128	111	17	160	129	31	189	162	27	233	221	12	275	260	15
	電 気、ガ ス、水 道 業	6	6	0	16	14	2	11	10	1	8	7	1	30	28	2
	サ ー ビ ス 業	617	348	269	639	354	285	719	378	341	806	433	373	884	474	410
	公 務	127	110	17	115	92	23	140	106	34	152	118	34	179	142	37
	分 類 不 能 の 産 業	2	1	1	3	2	1	1	0	1	6	3	3	4	2	2
小 計	1,565	966	599	1,692	1,001	691	1,891	1,009	792	2,057	1,247	810	2,309	1,433	876	

資料：国勢調査 「統計 おがの'84」より

●事業所数

II-2-4)表2

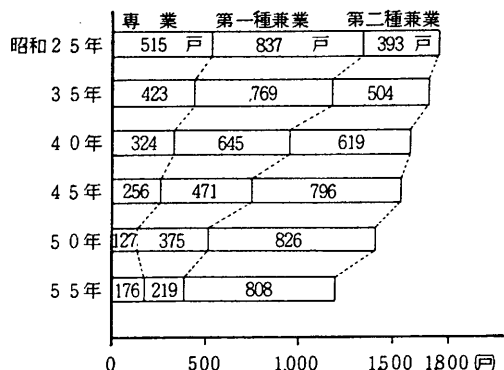
区 分	総 数		1 人～4 人		5 人～9 人		10人～19人		20人～29人		30人以上	
	事 業 所 数	従 業 者 数	事 業 所 数	従 業 者 数	事 業 所 数	従 業 者 数	事 業 所 数	従 業 者 数	事 業 所 数	従 業 者 数	事 業 所 数	従 業 者 数
38. 7. 1	534	2,312	426	796	57	365	29	366	11	275	11	510
41. 7. 1	572	3,043	443	877	66	436	33	390	11	258	19	1,080
44. 7. 1	571	3,303	441	847	74	475	(10人～29人)		35	507	21	1,474
47. 7. 1	590	3,626	435	855	88	565	38	510	12	306	17	1,390
50. 5. 15	599	3,832	442	919	85	554	44	582	10	250	18	1,527
53. 6. 15	645	4,158	466	955	108	695	39	523	14	331	18	1,654
56. 7. 1	708	4,402	519	1,117	109	712	47	643	13	317	20	1,613
A～C 農 林 水 産 業	1	20	—	—	—	—	—	—	1	20	—	—
D～L 非 農 林 水 産 業	707	4,382	519	1,117	109	712	47	643	12	297	20	1,613
D 鉱 業	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
E 建 設 業	115	745	78	166	22	149	7	92	3	72	5	266
F 製 造 業	136	2,033	67	191	28	179	27	378	3	79	11	1,206
G 卸 売 業・小 売 業	295	967	246	506	39	252	6	85	2	51	2	73
H 金 融 保 険 業	4	76	1	2	—	—	1	19	2	55	—	—
I 不 動 産 業	3	5	3	5	—	—	—	—	—	—	—	—
J 運 輸 通 信 業	13	117	6	10	2	15	3	38	1	20	1	34
K 電 気・ガ ス・水 道 業	2	12	1	2	—	—	1	10	—	—	—	—
L サ ー ビ ス 業	139	427	117	235	18	117	2	21	1	20	1	34

資料：事業所統計調査 「統計 おがの'84」より

ぬき、55年には約45%となって、小鹿野町就業者の第1位の職業となっている。

町内の事業所は年々数を増しているが、1～4人までの小規模の所が多い。産業別では「卸売業・小売業」が295(S56.7.1現在)で1位となるが、従業者数からみると「製造業」が1位である。

●農家戸数 II-2-4) 図1



小鹿野町の農家戸数はS25年で1745戸(総世帯数の47.1%)、35年になると1696戸少し減るが割合は61.5%となる。その後徐々に減って、45年から50年にかけての5年間に約200戸、割合からみて約10%も減ってしまう。S55年現在で1203戸(36.0%)、農家人口は5681人(総人口の44.5%)である。

専業・兼業別に見ると上図のように、50年と55年との比較では、専業が127戸から176戸に増えてはいるものの、主な傾向として専業及び第一種兼業農家が年代とともに減少し、第二種兼業農家の割合が増えていることが顕著である。

以上のように小鹿野町の輪郭を辿ると、そこに依然農村としての地域的特性と並んで、特に三田川地区には共同体の伝統的性格が残りをとどめていることがわかる。したがって当域は、本調査の目的にとって適格な必要条件を備えた対象地域と認められる。

参考・引用文献「小鹿野町誌」

「小鹿野町勢要覧・小鹿野'82」

「統計 おがの'84」

「小鹿野町の文化財」

III. 調査結果

A. 基本的属性

1. 対象者：66人
2. 性別：女性
3. 平均年齢：70.4歳－終戦当時（S20年）約30歳
4. 就業状況：就業者－27、非就業者－21、無答－18
5. 職場：自宅－26、自宅外－6、無答－34
(ほとんどが主婦のかたわら農業・畑作・養蚕等の家業に従事)
6. 学歴：尋常小学校－32、尋常高等小学校－24、高等女学校－2、実業(専門)学校－2、無答－6
7. 家族構成：「(曾)祖父－母、世帯主－本人、子ども3人以上」の類型－40
8. 住居：一戸建－59、無答－7
9. 部屋数(玄関・トイレ・浴室は除く)：3室まで－16、4室以上－40、無答－7

以下B 食形態 C 子どもの食行動 D. 食習慣の項目については、まず単純集計の結果内訳を表示、説明し、それによってそれぞれの傾向を引出すことにする。

B. 食形態

a. 食作法

1 <食事場所>－「ふだん食事する部屋が決っていましたか」

決まっていた	決まっていなかった	無答
63	3	0

<決っていた場合その場所>

勝手・台所	居間	土間・板の間	無答
37	17	14	8

<決っていなかった場合その理由>

(部屋数が少ない)

<食事場所>については、まず「決っていた」

との回答が63で圧倒的に多い、しかし、「決っていた場合、その場所については、「勝手・台所」が一番多く、次に「居間」、「土間・板の間」の順になっている。

2 〈食卓〉－「食卓は以下のどちらを使用したか」

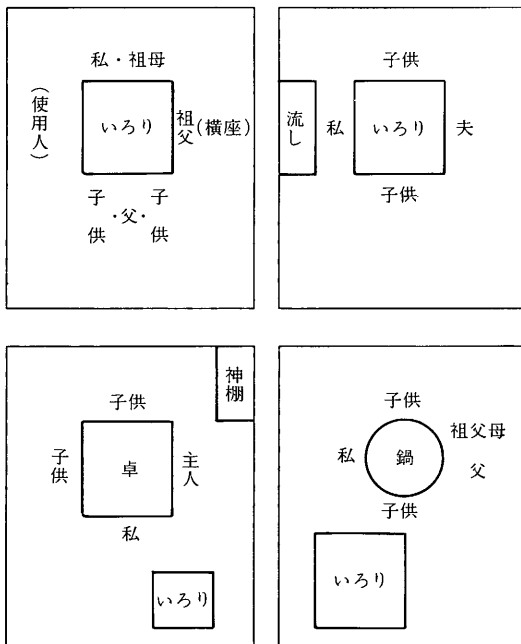
	座卓	テーブル	その他	無答	その他 (箱膳)
朝	29	1	29	7	
夕	29	1	29	7	

〈食卓〉については、朝・夕ともに座卓・箱膳が29ずつで多く、テーブル使用が1だけある。

3 〈座卓〉－「食事の時、ご家族の皆さんの座席は決っていましたか」

決まっていた	決まっていなかった	無 答
54	10	2

〈決っていた場合の座席図〉



基本的にはほぼ同ような座席図を類化することとした。

3-1) 〈座席の決っただいたいの理由〉

	準備や片づけに便利	テレビがよく見える	準備や片づけの手伝い	子どもの世話	上座を基準に	なんとなく	その他	無答
父	1	0	0	0	26	11	4	12
母	40	1	1	0	6	0	4	3
祖父	0	0	1	0	15	6	7	25
祖母	3	0	1	0	8	9	5	28
子供	0	0	3	0	2	20	8	21

その他

「火を絶さない」、「習慣」、幼児は「私や祖母とそば」となっている。

3-2) 〈決っていない理由〉については、「大家族だったので2回に分けて」、「早く座った順」、「子供が先に」、「子供については理由がない」、「炉のそばでなんとなく」等。以上のように〈座席〉については、「決っていた」が54とやはり圧倒的で、「決っていない」が10である。その理由をそれぞれみると、決っていた場合の〈父親〉は〈上座〉を基準にか26、「なんとなく」が11、「その他」が4、「準備や片づけに便利」が1ある。〈母親〉は、「準備や片づけに便利」が40と大半を占め、「上座を基準」が6、「その他」が4、「準備や片づけの手伝い」が1となっている。〈祖父〉は、「上座を基準に」が15、「なんとなく」が6、「その他」が7、「準備や片づけの手伝い」が1、〈祖母〉は、「上座を基準に」が8、「なんとなく」が9、「その他」が5、「準備や片づけに便利」が3、「準備や片づけの手伝い」が1、とそれぞれなっている。〈子供〉については、「なんとなく」が20、「その他」が8、「準備や片づけの手伝い」が3、「上座を基準に」が2となっている。

これらについて言えることは、第一に伝統的な「イエ」制度の一端が反映していることであり、すなわち、基本的に、「ヨコザ」を上として、祖父、父、祖母、母、子供という順に座席が決められているのである。しかし、第二に〈食事場所〉が炉を囲むという伝統的な居住形態に基づいていること

であって、そして「居間」より「台所・勝手」が多いということは、第三にそうした「イエ」制度の反映より、食事の「用意」や「あと片づけ」等の利便性が重視されつつあったことがうかがわれる。

4 <食器> - 「ご家族にひとりひとりの食器（箸、お茶わん、おわん等）が決っていましたか」

決まっていた	決まっていなかった	無 答
59	6	1

4-1) <決っていた理由>

大きさに よって	衛生面を 考慮	お互いの存在を 確認するため	習 慣 だから	その他	無答
12	9	13	19	13	1

4-2) <決っていなかった理由>には「夫だけ決っていた」が2, 「どれも使ってもよかったから」が1, 「ものがなかったから」が1等がある。このように <食器> については、「決っていた」が59, 「決っていなかった」が6でほとんどの家庭は各自の食器は決っていたことになる。しかし、その理由については、「習慣だから」が19, 「お互いの存在を確認するため」が13, 「大きさによって」が12, 「その他」「毎日は洗えない」, 「自分のものなら洗わないですむ」「柄（絵、模様）でまちがわないように（御膳があったから）」, 「誰れのものかすぐわかる」が13, 「衛生面を考慮して」が9等のように決定的な内容が見い出せない。

5 <箸箱> - 「めいめいで自分の箸箱を使っていましたか」

使っていた	使っていなかった	無 答
10	56	0

この項目については、「使っていなかった」が56であり、「使っていた」が10と、使用していない方が多く、これはおそらく、箸立なるものを使用し家族全員のものを一緒に立てておさめて

いたものと思われる。

6 <箱膳> - 「あなたは箱膳を使っていたことがありますか」

使っていた	使っていなかった	無 答
57	9	0

<年代>

20年	25年	30年	35年	40年	50年	無答
29	7	12	3	3	1	1

戦後わりと長くまで……1

<場所>

埼 玉	43
無 答	14

<箱膳> については、「使っていた」が57と圧倒的で、「使っていなかった」のはわずかに9しかない。また、<年代> をみると、「昭和20年頃まで」というのが29, 「昭和30年頃まで」が12, 「昭和25年頃まで」が7で、これによって大体昭和20年から30年頃にかけて箱膳がしだいに使用されなくなってきたことが示されている。<場所> は、埼玉県内が43となっているが、その殆どは地元周辺を指している。

7 <食事回数> - 「毎日の食事は、朝・昼・夕の3回でしたか」

は い	いいえ	無 答
30	34	2

これについては、「朝・昼・夕の3回」という回答が30で、「3回以外」が34あり、これは朝・昼・夕の他に午後3時頃の「こじゅうはん」が加わったからである。それはこの土地に固有な事柄であるが、当時の食糧事情からして「食事」と見なすべきである。というのは「まずいものばかりで腹がへった」, 「重労働なのに米に麦がまぜてあったため、空腹になった」, 「仕事の都合で」というような理由がその点を物語っている。

8 〈食事時間〉－「食事の時間は何時頃でしたか、またどのくらいの時間を必要としましたか。」

〈食事開始時刻〉－(時：分)

	5:30	6:00	6:30	7:00	7:30	8:00	8:30	無答
朝	7	8	6	30	4	5	2	4
夕	0	9	6	22	7	13	5	4

〈食事時間〉－(分)

	10～15	15～30	30～60	60～	無答
朝	18	35	8	3	2
夕	9	25	24	5	3

〈食事開始時刻〉については、〈朝〉、〈夕〉ともに「7時」が多く、〈朝〉で30、〈夕〉で22、次に〈夕食〉で8時の時に13と回答されていて、他の〈5:30〉、〈6:00〉、〈6:30〉〈7:30〉、〈8:00〉、〈8:30〉と散漫である。〈食事時間〉については、〈朝〉は「15分から30分が多く、〈夕〉は15分から30分」と「30分から60分」が同程度に割合多い。その「10分から15分」「30分から60分」、「60分以上」にはバラつきがみられる。

9 〈食事状況〉－「食事の際にはたいいご家族が全員そろいましたか」

	はい	いいえ	無答
朝	54	10	2
夕	60	4	2

この項目については〈朝〉・〈夕〉とも全員そろっているが目立ち〈朝〉54、〈夕〉60となっている。「いいえ」の場合、その理由には、〈朝〉については、「主人が不在」、「朝ばかのため」、そして「子供が先で、女が後」、〈夕〉については、「よいばかのため」等があった。代上〈食事回数〉・〈食事時間・状況〉を含めてそれら家業に従事する都合によって左右されてきたものと、概括される。すなわち、それには共同体を基盤とする生活様式の規定性がうかがわれるのである。

10 〈食事の用意とあと片づけ〉－「食事の用意とあと片づけについての役割は」

	私の役割	主人の役割	(祖)父母が分担	その他	無答
用意	56	2	7	4	2
あと片づけ	53	2	7	2	6

ここでは、〈用意〉〈あと片づけ〉共に「私の役割(回答者)」が56、53と圧倒的に多く、次に「祖父母」が分担が7でさらに少ないのは、「主人の役割」というのが2という回答であるが、これを概ね先の「イエ」秩序にしたがってうなづけよう。

以上各項目について概観してきたが、それによって食作法について認められる傾向は、一方で伝統的な「イエ」秩序や居住形態、他方で基本的な共同体の生産様式ないし家の生業にも規定されているものと要約されよう。しかし、同時にそうした伝統をしいに食事の利便性が優位してきていることも重視されなければならない。

b 食法

11 〈調理時間〉－「夕食の調理時間はおよそどのくらいかかりましたか」

～30分	30～60分	1時間～1時間半	1時半～2時間	2時間～	無答
13	19	21	6	1	5

〈夕食の調理時間〉は「1時間から1時間半」にかかったとの回答が21と最も多く。「30分位」が13、「30～60分」が19とかなりの数を占め、それ以外に「1時間半から2時間」も6件あった。調理時間が少ないことは、概して仕事の都合からありあわせのものでまにあわせる傾向になったと推測されるが調理時間が多く費されている家庭も料理内容が豊かであった訳ではない。むしろ当時の台所設備が整わず、家族も多くそのために調理時間が長がかかったものと考えられる。

12 〈献立〉－「献立は以下のどの点を優先的に考慮されましたか」

「子どもの食生活と娯についての総合的研究」(2)

a	栄養のバランスを大切に考えた	0
b	安上がり	0
c	料理をするのが簡単	0
d	家族の好み	0
e	ありあわせのもの、旬のもの	57
f	その他	0
g	無答	8

本項目はまず、当初以下に続く三地域を対象とした「現代食生活の実態調査」の一項目として用意されたものであったことから、本調査のように過去の食生活を把握するには適当でなかったことを前置きしておかなければならない。

〈食事の献立て〉に関しては、「ありあわせのもの、旬のものを食べる」とが一般的であり「配給を使うしかない」や「とにかくお腹一杯になりさえすればよかった」とか、更に「栄養のバランス、家族の好み」など考えていられなかった、というのが実状であった。

13 〈調理〉－「あなたは好んで調理なさったほうでしたか」

だいすき	すきなほう	どちらとも いえない	あまり好き ではない	きらい	無 答
8	16	26	9	2	4

〈調理をすること〉について上記の如く、「どちらともいえない」と答えた26を含めて「あまり好きではない」と答えた者が半数以上である。しかしこれには「田畑仕事、蚕の世話等に忙しい」の他に、「責任から」、「自分の仕事」、「嫁がやるのがあたりまえ」が補足されていることを付記しておかねばならない。

14 〈外食〉－「ご家族で外食をされましたか」

することが多い	時々する	あまりしない	全くしない	無 答
0	0	4	61	0

当時〈家族での外食〉について、「全くしなかった」家庭がほとんどである。その〈理由〉と

しては、「外食に行く余裕もなかったし、場所もなかった」とか「世の中がそうであった」やまた「町へ出るにも不便であった」など上記の61同様、また4も含めて、本項目も当時の状況に即さなかったことを示している。

以下15、16ともに、後続の3地域の「現代食生活の実態調査」の参考として用意されたものであり、そこでの考察に組み入れられるので、ここでは一応それぞれの結果内訳を列挙することに留めたい。

15 〈既製食品〉－「既製の弁当、惣菜、冷凍、インスタント食品などをどう思われますか」

a	すぐできて便利、自分では作れない嫁が買ってきて使う	26
b	ご時勢だからしかたがないが、味がよくない、手作りのものがよい	5
c	着色料や防腐剤が身体によくない、買ってもみない、きらい、そんなものにたよると人間がものぐさになる	33
d	無 答	1

以上のように回答を分けると、①群は「肯定」的で、②は「中間」、③は「否定」的な傾向となり、①に②を加えた場合に③とほぼ同数になる。特にその中で「そんなものにたよると人間がものぐさになる」は精神的影響を考慮した意見として興味深い。

16 〈健康食品〉－「最近流行の自然、健康食品については、どう思われますか」

a	良いと思う、使うと栄養をとるのが楽、たべたいものを食べるのがいい	7
b	重宝だと思うが、心配である	7
c	関心がない、嫌い、おっかない、今の人は健康にこだわりすぎている、人間は土に生き土に育っているから自然が一番いい	49
d	無 答	2

同様に①群を「肯定」、②を「中間」、③を「否定」的回答とすれば、ここでは③が圧倒的に多い。また同じように「人間は土に生れ土に育っているから自然が一番いい」は、当時の食生活の伝統的な信条をうかがう意味でやはり興味深い。

17 〈食材料〉－「穀類や野菜、果物などお宅でとれるものがありましたら多少にかかわらず種類、場所を記入して下さい」

1) 種類

大麦、小麦、とうもろこし、そば、きび、ひえ、あわ
じゃがいも、さつまいも、里いも
大豆、小豆、落花生
大根、はくさい、人参、午ぼう、茄子
ほうれん草、しゃくし菜、水菜(つけ菜)
西瓜、葱、胡瓜、生姜、柚子、三つ葉、
せり、フジの根、こんにゃく、いんげん、
柿、栗、お茶

2) 場所

耕地(田、畑) 庭、軒先を含む。

前述したような地勢から、当地域ではもともと稲作栽培が不可能で、そのために米は他から買入れねばならなかった。そして畑作物としては、主に大麦、小麦、とうもろこし、そば、並びにじゃがいも、さつまいもなどを栽培し、主食の一部に用いたわけである。配給制度がしかれてからは、米食が比較的安定してきたものの、それでもやはり麦やさつまいもをまぜることが一般的であった。それはそれとして以上のように当時の食生活が自給自足に基づいていたことが一目瞭然である。

18 〈食内容〉－「お子さんの一日の食事内容(ないし献立)を教えて下さい」

朝食	麦ごはん、イモごはん(「すっぴきわりめし」)、(野菜の)みそ汁、つけもの、つくだに、おなめ(しょうゆのもと)、魚(塩づけないし干物)こんにゃくや野菜の煮つけ
昼食 (弁当)	朝に似たもの、弁当(イモないし麦弁当)、おにぎり(梅干かかつおぶし)あげもの、魚(塩づけか干物)、のり、ふりかけ、みそ漬
夕食	うどん(干、手打、煮こみ) 水とん(とっちゃんげ)、おかゆ おじや

上記の〈食内容〉は実際のところ大人－子どもとの区別がない。主食は日常麦ごはん、イモごはん、もろこし、いも等で純然たる米食は祝、祭日の行事食にむけられていた。他にふだんは、みそ汁、漬物、「おなめ」(嘗味噌の一種)や野菜の煮つけ、いわしの干物等が添えられていたことがわかる。夕食はうどん、水とん、おかゆなどが主でうどんはゆでてしょうゆをかけて食べたり、煮込みにすることもあった。この地方でもみそ、しょうゆは無論自家製であった。このように食事内容は決して潤沢ではなかったと言えようし、また朝、昼、夜とも基本的にほぼ同様であったというのが実状であるが、当時の食糧事情からして、こうしたことは何もこの地域にかぎったことではなかったと言えよう。更にある郷土史家によれば、「ものび」でもないのにいわしなんか買って食うようじゃ、だから身上がのびないんだよ」というような陰口が聞かれたとのことである。そしてまたどちらかと言えば富裕な家の方が質素な食事内容であり、乏しい家の方がより豊かな食物を嗜好しようとしたとのことであり、これらはいずれも共同体的な「食意識」や、階級的な「食志向」の一端がうかがえる意味で大きな関心をそそる。

以上食法について概観してきたが、そこでまず要約しうるのは、食事や調理がやはり家業や「イエ」意識によって規定されていることである。また食材料や食事内容が第一次的に自然

的資源や産物に依存していたことが顕著であり、そこには共同体の物質的規定要因が認められる。しかし反面それらにはかの食意識や食事志向のように共同体の階級ないし生産関係が介入している面も重要な要因として看過できない。

c. 子どもの食行動

1. 〈食事内容〉－「お子さんの一日の食事内容（ないし献立）を教えてください」

本項目については既に取扱ったので、ここでは重複を避け、後続の「現代食生活の実態調査」に対する歴史的比較の材料として保留しておきたい。

2. 〈所要時間〉－「お子さんが食べ終わるまでに要する時間はだいたいどの位でしたか」

	10～15分	15～30分	30～60分	1時間～	無 答
朝食	23	35	3	2	2
夕食	14	33	11	2	5

〈食事に要する時間〉も、〈朝食〉では、「15分～30分」と大半を占め、次に「10分～15分」が続いている。〈夕食〉についても時間が短く、ゆっくりと一家団らんを楽しむような様子はいかがかわれない。このような結果については、子どもにとっての学校のみならず、既にふれたように家業の都合をも想起すれば、十分うなづけよう。

3. 〈食事の用意と後片付け〉－「学校に上がる前のお子さんに、食事の用意や後片付けを手伝わせましたか」

(1)用意について

食器を並べる程度	も っ け る	ほとんどさせなかった	全くさせなかった	無 答
13	6	9	33	4

(2)あと片付けについて

自分の食器だけ運ばせる	他の食器も運ばせた	食器を洗わせ	食器棚にしまわせた	ほとんどさせなかった	全ったくさせなかった	無答
11	4	5	4	10	26	5

以上〈食事の用意や後片付け〉に関しては、〈用意〉について「全くさせなかった」が33と突出し、「ほとんどさせなかった」が9で、双方を合せると圧倒的となる。そして、手伝わせたにしても「食器を並べる程度」が13で、「もりつける」は6にすぎない。〈後片付け〉については、「全くさせなかった」が26とやはり突出し「ほとんどさせなかった」が10と続く。同様に双方を合計すると大半を占めることになる。したがってこれらの手伝いは少なかったことになるが、しかし補足してあるように、子ども達は概して草取りやまきとり、水くみ、蚕の手伝いなど家事や家業の手伝いを担わされていたわけである。また「台所は女が入るもの」「男や子どもが入るものではない」といった伝統的観念が根強かったり、煮焼きは別として、当時の食事内容が一般に質素であって、かつ箱膳の使用が一般的であったことから、食事の準備やあと片付けが今日に比べてより簡略に済まされていたことも考えられる。

4. 〈食事前のしつけ〉－「食事のしつけについて、特に注意した事柄をお選び下さい」

朝食の前に顔を洗わせる	49
朝食前に着がえさせる	31
手を洗わせる	29
毎食後に歯をみがかせる	12
あいさつ（いただきます、ごちそうさま等の唱和やお祈り）をさせる	40
家族全員がそろってから食べさせる	29
その他	1

これらの回答をみると、「朝食の前に顔を洗わせる」が49で最も多く、次に「あいさつをさ

せる」が40で、以下「朝食前に着がえさせる」31、「手を洗わせる」29、「家族全員そろってから食べる」29、「毎食事後に歯をみがく」12の順で続いている。「朝食前の洗顔」は、一般的な習慣として受取られるが、「あいさつをさせる」も、その理由をみると、「習慣として」と答えた者が28もあり、「両親や作物、食物をつくってくれた人達に感謝するため」－7、「神や仏に感謝するため」－5、その他「ありがたさを知らせるため」－1という具合に、感謝の意味が強調されなくなってきていることがわかる。とはいえ「朝食の前の着がえ」や「手洗い」については、かなり励行されていたものとみられるし、それらが「洗顔」同様食事に対する心構えにつながったことは疑えない。更に「家族そろってから食べさせる」についても、数値からはさほど強調されていたとは思われないが、やはり「家長より先に食べなかった」との補足をみると、一般的傾向と解される。しかしこの点は、先にふれたように基本的に家業への従業形態に規定されているのであり、したがってそれによっては、唯一の内訳であるが「またせることをしなかった」点も考えられるのである。

5.〈食事中のしつけ〉－「食事中お子さんに特に注意した事柄について」

ひじをついて食べない	姿勢正しく座わる	寝ころばない	立ち歩かない	大きな声で話をしない
31	34	29	30	28

キョロキョロわき見をしない	クチャクチャとかむ音をたてない	迷い箸をしない	箸をごはんに立てない	こぼさない
26	21	20	40	42

残さない	好き嫌いを言わない	その他
37	27	6

以上の結果は散漫であり、数値の差もあまりない。しかし上位の回答を大別すれば、「こぼさない」－42、「残さない」－37のように、①「食物を大切にすること」次に「箸をごはんに立てない」－40の②「故事にしたがうこと」、及び「姿

勢を正しく」－34、「ひじをついて食べない」－31、等の、③「姿勢を正すこと」の順で留意されていることになる。これらを〈食事のしつけ〉の主要な内容と見るならば、①には当時の食糧事情ないし物質的情况の反映が、②からは伝承的意義の尊重が、並びに③には外面的態度矯正が、それぞれうかがわれることになる。

6.〈食事中の対処〉－「食事の際、次のような場合には、お子さんにどのように（注意）なさいましたか」

	1)床や畳にこぼしたら	2)食卓の上にこぼしたら	3)口のまわりや服につけた時	4)食べ残した時
食糧事情の悪い時だけにひ④うって食べさせるか親が食べた	21	40	12	22
拾ってかたづけさせる⑤(衛生面でよくないので捨てる、家畜にやる)	17	7	10	18
「こぼさないように」⑥「拾いなさい」と言う⑦(注意したり、しかったりしているが食べたか捨てたか不明)	27	18	28	4
⑧まずそのようなことはなかった				19
⑨注意しなかった				1
無 答	0	0	15	0

これらの結果は1)～4)の場合を想定した自由記述のため以下のように相対的に大別した。

- a：「食糧事情の悪い時だけにひろって食べさせる」か「親が食べた」－「経済面留意」
- b：「拾って片付けさせる（衛生面でよくないので捨てる、家畜にやる）」－「経済面以上に衛生面留意」
- c：「こぼさないようにとか拾いなさいと言う（注意したり叱ったりしているが食べたか捨てたか不明）」の－「外面的態度尊重」
- d：まずそのようなことはなかった－「非該当」
- e：注意しなかった－「非該当」

それによると1)では「衛生面」を考慮して③が最上位にくるものの、④は2位に続く。2)の場合食卓上であるためであろう③－④は逆転する。3)ではやはり1)と同様衛生面を考慮して③－④と

なり。4)では衛生面が最も強く留意されるが、それ以上に「経済面」が優位している。また1)～4)について合計すると①-95, ②-77, ③-52の順となるのでありそれらはそのまま食事の躰の根拠として読みとられる。またそこにはやはり当時の食糧事情も強く反映している。すなわち4)の「非該当」, 「まずそのようなことはなかった」は「食べ残すことがなかった」を内容としているのである。

- 5)「好物が出されてその量が少なくと不満を言った時」については、以下のようにまとめられる。

大きい子にがまんさせた, ないのだからしかたがない	19
不満を言うことがなかった, 平等にわけた	31
すきなだけ食べさせた, 他のものをかわりに食べさせた, 自分のものを分けた	7
「またつくってあげる」などと言った	1
注意しなかった	3
無 答	4

ここでは「すきなだけ食べさせた, 他のものをかわりに食べさせた. 自分のものをあげた」というように, 子どもの欲求に応えようとした者は, 7名にすぎない。反面「不満を言うことはなかった, 平等にわけた」-31と, 「大きい子にがまんさせた, ないのだから仕方がない」-19の, 両者を合すると50に及ぶことが注目される。これは当時の客観情勢から欲求が抑制されざるをえなかったことを如実に示している。しかしそれだけに子どもも納得せざるをえなかったし, その点少くとも過保護によって「甘え」が助長されるようなことはなかったわけである。

7. <食物の好き嫌い> - 「お子さんは, 食べ物に好き嫌いがありましたか」

あ っ た	な かつ た	無 答
15	50	0

- 1) <嫌いな食べ物>

にんじん	ねぎ	大根	しいたけ	ピーマン	なす
7	5	2	2	1	1
ごぼう	牛乳	とろろ	魚	肉	
1	1	1	1	1	

これらの結果については, 「あった」-15, 「なかった」-50となっているものの, まず前項目と同様に「好き嫌いをいえるような状況でなかった」ことが汲みとられる。またく嫌いな食べ物」については, 野菜類に偏っているものの, その他は日常の食事内容としては, 例外と見るべきである。

- 2)「嫌いな食べ物がある場合, あなたはどのように対応しておられましたか」については,

偏食しな いよ うに 調理 した	「身体に 良いから」 などと注 意した	一口でも 必ず食べ させた	しいて食 べさせな い	その他	無 答
2	12	0	7	0	5

以上の「身体によいから」が12と多いものの, この結果は, 子どもの健康, 体力の向上と並んで, 食物を大切にしたものを受け取られる。

8. <箸のもち方について> - 「どのようにしつけたでしょうか」

親を見習 わせた	手をとっ て教えた	言葉で説 明した	注意しな かった	その他	無 答
12	21	5	7	19	1

ここではなるほど「手を取って教えた」が21で最も多く, それに「親を見習わせた」-12, と「言葉で説明した」-5を加えると大半を占める。しかしそれ以外の回答も少くないし, また全体的に散らばっていることから, <箸のもち方>に格別な注意が払われたとは言い難い。

9. <食事のしつけの役割> - 「当時, 食事のしつけについてお宅では」

1)その程度

きびしい 方だった	かなり心 がけてい た	どちらと もいえな かった	あまりし ない方だ った	全くしな いと言っ てもよか った	無 答
11	8	17	19	8	2

2)食事のしつけは主に

主 人	私	父	母	その他	無 答
8	35	2	12	5	3

このように〈食事のしつけ〉については、なるほど主に「私」、つまり母親－35の役割制であったと言えるが、しかし〈その程度〉を見ると「あまりしない方だった」－8に「どちらともいえなかった」－17を加えると42となり、「きびしい方だった」－11と「かなり心がけていた」－8を合算しても19にすぎない。したがって〈食事のしつけ〉がこれと言ってなされていたとは言い難い。

以上子どもの食行動について傾向を辿ってきたが、概括するとまずそれにはやはり当時の食糧事情ないし物質的制約が顕著である。したがって食事の躰では「外面的態度矯正」以上に「経済観念の徹底」が内容として優位することになる。またその際「洗顔」、「着がえ」、「手洗」等は、たしかに食事の心構えにつながるとも考えられるが、「唱和」において感謝の気持がさほど強調されていないことは、「宗教的意義」が根拠にされているものの、食の伝統的意義が薄れつつあったことを物語っている。更に総じてこの種の躰は殊更行なわれていたとは言い難いし、それには家業への専念という事情もあったが、そうした事情や「全員そろって食べる」中で子どもが「イエ」意識をおのずから吸収し、社会化の足がかりにしたことは疑いない。

D. 食習慣

1. 〈行事食〉－「（年中）行事の日には、特別に食事を作ってあげましたか」

	必ずつ くった	時々つ くった	どちら ともな かった	ほとん どつな かった	全くつ くた なかった	無 答
お 正 月	63	1	0	0	0	1
ひなまつり	56	1	1	3	2	2
お 彼 岸	60	2	0	1	1	1
子どもの日	36	2	2	5	17	3
お 盆	63	0	0	0	1	1
十 五 夜	59	2	0	0	2	2
クリスマス	1	2	1	0	28	33
七 五 三	33	7	2	2	18	3
誕 生 日	20	3	2	8	29	3
そ の 他	祭り、七夕、えびす、お日待ち、 十三夜、八十八夜、節分、命日、十日夜					33

先ず〈お正月〉については、「必ずつくった」が63と群を抜いている。これは今日でも最も代表的な伝統行事として十分予想された結果であった。

〈ひなまつり〉については、「必ずつくった」が56とやはり高い割合を示している。これは本調査における対象地域の選択理由でもあった「オヒナゲエ」という伝統行事と密接に関わっているし、それが現在でも子ども達によって依然として受け継がれていることが、そうした数値を高くしている。

〈お彼岸〉についても春、秋年2回の仏事・仏参を包括しているが、「必ずつくった」が60と数値が高く、ほとんどの家で何らかの行事食が作られている。

〈子どもの日〉については、「必ずつくった」が36、「時々つくった」の2を加えても38で、わずかに半数を越えるにすぎない。しかしこれについては「端午の節句」を別とすれば、〈子どもの日〉が国民の祝日として制定されたのが比較的最近のことであることを考慮すべきである。

〈お盆〉については、「必ずつくった」が63と圧倒的で、同じ仏事である〈お彼岸〉を凌ぐとともに〈お正月〉に、程度についても比肩している。このことは〈お盆〉が、やはりなお最も代表的な伝統行事の一つであることを示しているよう。

更に〈十五夜〉については、「必ずつくった」

が59で、「時々つくった」－2を加えれば、最上位にはほぼ肩をならべる。古来この時節は観月の好時期であると共に、その年の豊饒を感謝する時期として、様々な神事、祭事が行なわれたわけで、この〈十五夜〉はその中心的な位置にあったといえよう。

〈クリスマス〉については、これまでと反対に「全くつくらなかった」が28と全く逆転している。その点でむしろ「必ずつくった」－1や「時々つくった」－2の方が目立つ。前者は、一般に回答者がクリスチャンでもないかぎり考えられないが、残念ながら本調査ではそれを確認する属性項目を用意しなかった。また後者は本調査の問題点から最近の傾向と混同されていることが考えられる。しかしそれ以上に「無答」が33と多いことが留意される。これは「全くつくらなかった」の数値との関連で、この項目の「非該当」ないし対象者にとってこの行事が疎遠であったことを示すものと受けとられる。すなわちそれは周知のように〈クリスマス〉が本来キリスト教の伝統的意義に基づいていることから、我国では特定地域を除いてそうした伝統が根づいていないからである。

〈七五三〉については、「必ずつくった」が約半数の33、反対に「全くつくらなかった」が18と、我国固有の伝統行事としては他に比べて行事食をつくる度合いが低い。とはいえそれは元来祝日が特定していなかったし、商業主義化がかなり早期から行われたことを考え合せば、こうした結果も妥当なところといえよう。

最後に〈誕生日〉については、「全くつくらなかった」が29で、「必ずつくった」の20を上回っている。これも〈七五三〉同様商業主義化が早く、しかもどちらかと言って欧米的影響であることを考慮すれば、こうした結果もうなづけよう。むしろそれ以上に〈その他〉に寄せられた諸行事の多いことが注目される。しかもそれらは面接では、たいていが「必ずつくった」などそれに匹敵する程度である。それは上記の如く、「命日」を除いて殆んどが民俗信仰や共

同体祭祀にまつわる行事である。更にそれらは農耕儀礼に基づいていて、その点では、先の〈十五夜〉はもとより春分、秋分をめぐる〈お彼岸〉も当てはまる。したがって〈行事食〉は〈お正月〉や〈お盆〉のように最も代表的な伝統行事の他に、とりわけ土着の民間信仰や共同体祭祀、それも基本的に農耕儀礼にまつわる慣行について、よくつくられていたものと言える。

2. 〈行事食の意味、いわれ〉－「行事食の意味ないしいわれについて、お子さんに話してあげましたか」

たいてい話した	ほとんど話さなかった	無答
27	34	4

しかしこのように、「たいてい話した」は27で、「ほとんど話さなかった」－34を下回っている。したがって子どもが親以外から耳にしないかぎり、当時こうした伝承は、既に薄れつつあったと解すべきであろう。

3. 〈仏壇・神棚・祠〉－「お宅には仏壇や神棚祠がございましたか」

神棚・仏壇・祠	神棚・仏壇	神棚	無答
23	37	3	2

↓ 上記以外にあるもの

(氏神、大神宮、えびす様、八幡様、山の神、天狗様、おいなり様)

これについては、「神棚・仏壇」－37に、「神棚、仏壇、祠」－23、「神棚」は3件と続いているが、そのような内訳以上に総数65のうち63が、神棚、仏壇、祠を全部ないし部分的に祀っていたことが目立つ。さらにこれらの他に「恵比寿様」や「八幡様」、「天狗様」、「山の神」、「お稲荷様」等が祀られているのであり、それらもやはり民間・土俗信仰に集約される。

3.－2)－「(ある場合) ごはんや水等、毎朝お供えなさいましたか」

毎日供えた	時々供えた	ほとんど供えなかった	供えることはまずなかった	無答
51	11	0	1	2

↓

供えたそのわけは

- a 家の習慣で (7)
- b 先祖や故人となった身分 (11)
- c 神や仏への感謝と家の幸福を願って (13)
- d その他 (4)

そして仏壇や神棚、祠にはご飯や水等を「毎日供えた」が51、さらにそれに「時々供えた」－11を算入すれば62になり、殆んどすべてに相当する。更に〈供えた理由〉については「家の習慣で」が7とはなっているが、過半数の24から神仏や祖先への畏敬や感謝の念がうかがわれる。したがって「供えたことはまずなかった」－1を特例として除けば、当時この地域における人々の厚い信仰心とともに、こうして毎日供えたことは、そのあらわれとして解するに十分である。

3. -3) - 「(同様にある場合) お子さんにも供えさせましたか」

供えさせた	供えさせなかった	無 答
19	39	7

また子どもについては「供えさせた」が19で、「供えさせなかった」方が39と約半数にすぎず、あたかも前項目とは逆の結果のように思わせる。ところがそうではなく、これには仏壇は別としても神棚の場合、たいていその位置が高く、そのために子ども達が供え物をするには物理的に不可能であったという事情があることを強調しておかなければならない。

4. <ことわざ> - 「食事のことわざについて」

- ◎ お子さんに話したことがあるもの
- 御存知のもの
- / 御存知ないもの

	◎	○	/	◎+○
a ご飯を食べながら背伸びをすると、ご飯が腹に入らず背中の方に入って死ぬ	10	6	49	16
b 肘をついてご飯を食べると地震がくる	2	4	59	6

c	寝ころんでものを食べたり、食べすぎて腹になると、牛になる	53	11	1	64
d	一杓子で茶碗一杯のご飯を盛るな	13	26	26	39
e	左手でご飯を盛るな	11	13	41	24
f	こぼしたご飯粒は必ず拾え、さもないと眼がつぶれる	8	7	50	15
g	朝食に汁をかけて食うと出世しない	22	19	24	41
h	お赤飯に汁をかけて食うと、結婚式や葬式の日雨(君)が降る	28	27	10	55
i	正月の七草粥と15日の小豆粥を吹いて食ってはいけない、田植の時大風が吹く	10	11	44	21
j	箸から箸で食べ物を受け渡すな	1	15	49	16
k	風呂の中でものを食うと親の死に目に会えない	7	6	52	13
l	食器を箸でたたくと蛇が入ってくる	11	15	39	26
m	食器の口の欠けたものを食槽に出すと客が不幸になる、友はお産が重くなる	6	9	50	15
n	食事中、立って座席をあちこち移動すると、嫁入り先が決まらない、嫁に行くと腰がすわらない	11	20	34	31

この表についてはあらかじめその読み方を説明しておかなければならない。まずa～nには一般的な食事にまつわる故事を任意に用意してある。◎は「子どもに話したことがあるもの」、すなわち言わば当時「伝承したもの」である。そして○は、「(自身に)既知のもの」であるが、「子どもに話さなかった」を含意して、「伝承しなかったもの」となる。またしかし◎は「子どもに話したことがある」以上、○の「既知」を前提とするわけで、したがって◎+○は「伝承されていたもの」となる。更に/は、「知っていなかったもの」であるだけに、「伝承されていなかったもの」として受け取られよう。

そこでそれぞれについて特長を概括すると、まず◎+○は、cがほぼ総数であり、h、g、dの順で接近している。そして◎については、やはりc－53が突出し、その後に半数に及ばないながら、h－28、g－22、d－13の順で続いている。そこで◎+○に対する◎の比率を見てもcが64：53と目立ち、h－55：28、g－41：22は5割を越えているが、dは39：13と割合が低い。これらは「伝承されていたもの」を「伝承した」、つまり「伝承されたもの」の内容とその度合を示すものであり、それによればc－「外面的態度矯正」、h・g－「社会化への導入」、d－「宗教的禁忌」の順となる。また○は全体的に散漫で各数値も低い、その中ではh－27、

d-26, n-20, g-19, j-15, l-15の順で比較的高い。しかし◎+○に対する比率は、j-16:15が最も高く、l-26:15, d-39:26, n-31:20が約6割、g-41:19とh-55:27が5割に満たない。これらは「伝承されていた」にもかかわらず「伝承しなかったもの」、つまり「伝承されなかったもの」の内容と度合を示すものであり、それによれば、j, l, dの「宗教(俗信)的禁忌」、n, g, hの「社会化への導入」の順で、ついでにcの「外面的態度の矯正」は、64:11と最も比率が低い。したがってこうしたことは、「伝承されたもの」と「伝承されなかったもの」が度合において反比例し、すなわち相互に裏付け合っていることを示している。

以上当地域の食習慣を概括して着目すべきことは、その顕著な残存と伝統的意義の内容である。〈行事食〉については共同体祭祀ないし農耕儀礼が色濃く反映している。またそれは個々の家庭についてそのまま妥当する。しかしその〈いわれ・意味〉は既に薄れつつあった。また〈故事〉については「外面的態度矯正」に「社会化への導入」以上に重点が置かれ、「宗教的禁忌」はしだいに背後に退いている。こうした移行は食文化の伝統的意義が漸次に消滅してゆく過程の内容をも示すものであり、とりわけそこでは「宗教的意義」の衰退が明瞭である。

IV. 総 括

これまで調査結果の内容について検討してきたが、ここで要点をまとめておきたい。

当地域が、もともと狭隘な耕地によって農業生産を営む素朴な山村であったことは既にふれたが、そうした共同体の性格は当時その名残りを濃厚にとどめていた。したがってまた対象者が「一戸建て」で「4部屋以上」の家屋に居住し、家族形態も二～三世代の夫婦・子どもの同居する「拡大」ないし「系譜家族」であったことは、主要な傾向として殊更説明を要しない。そこでそのような共同体の物質的諸条件や生産様式・

関係並びにその他伝統的な生活様式就中食文化自体の「利便性」は〈食形態〉を一般的に規定することになる。それ故またそうした局面は〈食作法〉や〈食法〉を規定している居住、家族形態やそれに相応した「イエ」秩序、意識において具現している。こうした点について重要なことは、とりわけ昭和20～30年代にかけて〈箱膳〉から〈座卓〉の使用に移行していることである。それは当地域における〈食文化〉変容の一大過渡期を示唆するものと目されるし、更にそれを含めた生活文化一般にも妥当するのではないだろうか。

次に〈子どもの食行動〉についても同様に以上の局面が基本的に認められる。なるほどその〈躰〉は、「これと言った形」で行われていなかった。しかしその内容には物質的条件や生産様式・関係が「経済観念」の徹底に、共同体・「イエ」意識が儒教的な「外面的態度矯正」にそれぞれ結びついているものと捉えられる。しかし「宗教的意義」は明示的に保持されていたとは言い難い。

更に〈食習慣〉では、その継承が著しかった。特に〈故事〉については、既述したように「外面的態度矯正」、「社会化への導入」、「宗教的禁忌」の順で重点が置かれているが、このことは上記の〈躰〉の内容にはほぼ即応している。

したがって当地域の食文化の規定要因を大別すれば、「物質的要因」として自然的資源や生産物、つまり食糧事情並びに生産様式・関係及び、食文化の私便性、それに「非物質的要因」の「制度的要因」として共同体規範・「イエ」秩序、居住・家族形態、「精神的要因」として共同体・「イエ」意識、宗教的禁忌等に要約されよう。しかもそれらは原初的に共同体祭祀としての農耕儀礼に淵源しているわけで、したがって食文化の伝統的意義もそこに求めらる。そして当地域の食文化については、当時根本において「物質的要因」が「非物質的要因」を凌いでいたものと総括されよう。

V. 資料－調査(単純集計)結果

A. 基本的属性

- 対象者数：66 2. 性別：女性
- 平均年齢：70.4歳－終戦当時（S20）
約30歳
- 就業状況：就業者－27，非就業者－21，
無答－18
- 職場：自宅－26，自宅外－6，無答－34
（ほとんどが主婦のかたわら農業，畑作，
養蚕等の家事に従事）
- 学歴：尋常小学校－32，尋常高等小学校
－24，高等女学校－2，実業（専門）学校
－2，無答－6
- 家族構成：「（曾）祖父－母，世帯主－
本人，子ども3人以上」の類型－40
- 住居：一戸建－59，無答－7
- 部屋数：3室まで－16，4室以上－40，
無答－10

B. 食形態

I. 当時のお宅のふだんの食生活について
おうかがいします（行事，祭日以外）

- ふだん食事をする部屋が決まっていますか。

決まっていた	決まっていなかった	無 答
63	3	0

- 決まっていた場合，その場所

勝手・台所	居 間	土間・板の間	無 答
37	17	14	8

- 決まっていなかった場合 その理由
（ 部屋数が少ない ）

- 食卓は以下のどちらを使用でしたか

	座 卓	テーブル	その他	無 答
朝	29	1	29	7
夕	29	1	29	7

☆ その他では箱膳

- 食事の時，ご家族の皆さんの座席は決まっていたいましたか。

決まっていた	決まっていなかった	無 答
54	10	2

- 座席のきまっていた理由

	便片準 利づ備 けやに	手片準 伝づ備 いけやの	世子 話ど もの	上 基座 準をに	なん と	そ の 他	無 答
父	1	0	0	26	11	4	12
母	40	1	0	6	0	4	3
祖 父	0	1	0	15	6	7	25
祖 母	3	1	0	8	9	5	28
子ども	0	3	0	2	20	8	21

☆ その他では，火を絶やさないと，習慣，幼児は「私」や祖母のそば

- 決まっていない理由

- ・大家族だったので2回に分けて，ないし早く座った順 一子どもが先にー
- ・子どもについては理由がない
- ・炉のそばでなんとなく

- ご家族ひとりひとりの食器（箸，お茶わん等）が決まっていましたか

決まっていた	決まっていなかった	無 答
59	6	1

- 決まっていた理由

てに大 よき つさ	を衛 考 慮 面	をの 確 存 認 在 い	だ習 から 慣	そ の 他	無 答
12	9	13	19	13	1

☆ その他では：毎日は洗えない，自分のものなら洗わないですむ。柄（絵，模様）でまちがわないように，御膳があったから，唯のものかすぐわかる。

「子どもの食生活と躰についての総合的研究」(2)

2) 決まっていなかった理由

{ 夫だけ決まっていた — 2名
 { どれを使ってもよかったから — 1名
 { ものがなかったから — 1名
 { 無答 — 3名

1) 食事開始時刻 (時・分)

	5:30	6:00	6:30	7:00	7:30	8:00	8:30	無答
朝	7	8	6	30	4	5	2	4
夕	0	9	6	22	7	13	5	4

5. めいめいで自分の箸箱を使っていましたか。

使っていた	使っていなかった	無 答
10	56	0

2) 食事時間 (分)

	10~15	15~30	30~60	60~	無答
朝	18	35	8	3	2
夕	9	25	24	5	3

6. あなたは箱膳を使ったことがありますか。

使っていた	使っていなかった	無 答
57	9	0

9. 食事の際にはたいていご家族全員がそろいましたか。

	は い	いいえ	無 答
朝	54	10	2
夕	60	4	2

1) 使っていた場合の年代 (昭和)

20年	25年	30年	35年	40年	50年	無答
29	7	12	3	3	1	1

2) 使っていた場所

埼 玉	無 答
43	14

1) 「いいえ」の場合

朝—主人が不在, 朝っぱかのため
 子どもが先ず, 女が後
 夕—よっぱかのため

7. 毎日の食事は, 朝, 昼, 夕の3回でしたか。

は い	いいえ	無 答
30	34	2

☆ 「いいえ」においては

朝, 昼, こじゅうはん, 夜の4回

そのわけは

{ ・まずいものばかりで腹がへった
 { ・重労働なのに米に麦がまぜてあったため, 空腹になった
 { ・仕事のつごうで

8. 食事の時間は何事項でしたか。また, どのくらいの時間を必要としましたか。

10. 食事の用意とあと片づけについて

※ここより総数は65名となる。

	私 の 役 割	主人の 役 割	(祖) 父母が 分 担	その他	無 答
用 意	56	2	7	4	2
あ と 片 づ け	53	2	7	2	6

☆ 複数回答

11. 夕食の調理時間はおよそどのくらいですか。

~30分	30~60分	1時間~1時間半	1時間半~2時間	2時間~	無答
13	19	21	6	1	5

12. 献立は以下のどの点を優先的に考慮されましたか。その順位

- () A 栄養のバランス
 () B 経済面
 () C 調理方の簡単さ
 () D 家族の好み
 () E その他

以上の選択項目を用意したが、「時勢がら、選択している余裕はなかった」「順位はつけられない」との回答が多く、「ありあわせのもの、旬のもの」を優先している者が57名、無答8名となる。また、その他では「おなかがいっぱいになりさえすればいい」「配線を使うしかない」「とにかく食べることで精一杯、栄養など考えていられない」となる。

13. あなたは好んで調理をなさった方ですか。

だいすき	すきなう	どちらともいえ	あまりすきではない	きらい	無答
8	16	26	9	2	4

14. (休日を含めて)ご家族で外食をされましたか。

することが多かった	時々した	あまりしなかった	全くしなかった	無答
0	0	4	61	0

「あまりしなかった」「全くしなかった」理由

主人が自宅で食べたがる	子どもがさわいて他人に迷惑	食費節約	その他	無答
0	1	2	30	32

☆その他の内容では「行く余裕がなかった(場所一店も暇も)し、世の中がそうだった」「町へでるのが不便でたいへんだった」などがある。

15. 既成の弁当、惣菜、冷凍、インスタント食品をどう思われますか。(現在の)

〈自由記述〉

A	B	C	無答
26	5	33	1

- A- { すぐできて便利, 自分で作れない。
嫁が買ってきて使う。}
- B- { ご時勢だから仕方がないが, 味がよくない。手作りのものがない。}
- C- { 着色料や防腐剤が身体によくない。
買ってもしない。そんなものを使うと人間がものぐさになる。}

16. 最近流行の自然、健康食品についてはどう思われますか。

〈自由記述〉

A	B	C	無答
7	7	49	2

- A- { 良いと思う。使うと栄養となるのが楽。
食べたいものを食べるのがいい。}
- B- { 重ほうだと思いが心配である。}
- C- { 関心がない。嫌い, おっかない, 今の人は健康にこだわりすぎている。人間は土に生き, 山に育っているから自然が一番いい。}

17. 穀類や野菜、果物などお宅でとれるものがありましたら多少にかかわらず種類、場所を記入して下さい。〈自由記述〉

1) 種類

{ 大麦, 小麦, とうもろこし, そば, きび, ひえ, あわ, じゃがいも, さつまいも, 里いも, 大豆, 小豆, 落花生, 大根, はくさい, 人參, 午ぼう, ほうれんそう, しゅくし菜, 水菜(つけ菜), 西瓜, 茄子, 葱, 胡瓜, 生姜, 柚子, 三菜, せり, フジの根, こんにゃく, いんげん, 柿, 栗, お茶}

2) 場所

{ 耕地(田畑), 庭(軒先を含む)}

C. 食行動

II. 当時の食事におけるお子さんの行動や態度についておたづねします。

1. お子さんの一日の食事内容（ないし献立）を教えてください。

〈自由記述〉

主な内容

朝食	麦ごはんかイモごはん、「(「すっぴきわりめし」), (野菜の)みそ汁, つけもの (つくだに), おなめ(しょうゆのもと), 魚(塩づけないし干物), こんにゃくや野菜の煮つけ。
昼食(弁当)	朝に似たもの, 弁当 (イモないし麦弁当 おにぎり(梅干しかかつおぶし), あげもの, 魚(塩づけか干物), のり, ふりかけ, みそ漬け, 煮つけ
夕食	うどん(干, 手打ち, 煮こみ), 水とん(とっちゃんげ), おかゆ, おじや

☆ 中には「朝, 昼, 夕, おかゆもある」「朝と同じものが多い」「おかずらしいものがなかった」といった内容もある。

2. お子さんが食べるまでに要する時間は、だいたいどの位でしたか。

	10～15分	15～30分	30～60分	1時間～	無 答
朝 食	23	35	3	2	2
夕 食	14	35	11	2	5

3. 学校に上がる前のお子さんに、食事の用意やあと片づけを手伝わせましたか。

- 1) 用意について

食 器 を 並べる程度	もりつける	ほとんどさせなかった	全くさせなかった	無 答
13	6	9	33	4

- 2) あと片づけについて

自分の食器だけ運ばせた	他の食器も運ばせた	食器を洗わせた	食器棚にしまわせた	ほとんどさせなかった	全くさせなかった	無 答
11	4	5	4	10	25	6

☆ その他の内容では：草かり, まきとり, 水くみ, 蚕の手伝いをさせた。家事が忙しかったので。

4. 食事の内容について、特に注意した事柄をお選び下さい。

A	B	C	D	E	F	G
49	31	29	12	40	29	1

- A. 朝食の前に顔を洗わせる。
B. 朝食の前に着がえさせる。
C. 手を洗わせる
D. 毎食事後に歯をみがかせる。
E. あいさつ (「いただきます。ごちそうさま」等の唱和やお祈り) をさせる。
F. 家族全員そろってから食べさせる。
G. その他 (家長より先に食べなかったまたせることをしなかった)

- 2) あいさつをさせるわけ

a	b	c	d
28	7	5	1

(複数回答1名)

- a. 習慣として
b. 両親や作物をつくってくれた人達に感謝するため
c. 神, 仏に感謝するため
d. その他 (ありがたさを知らせるため)

5. 食事中お子さんに特に注意した事柄について。

ひじについて食べない	31
姿勢正しく座る	34
寝ころばない	29

立ち歩かない	30
大きな声で話をしない	28
キョロキョロわき見をしない	26
クチャクチャとかむ音を立てない	21
迷い箸をしない	20
箸をごはんに立てない	40
こぼさない	42
残さない	37
好き嫌いを言わない	27
その他	6

☆ その他の内容では「けんかをしないように、食べ残すほどとらない。あまり気をつけなかった（4名）」

6. 食事の際、次のような場合には、お子さんにどのように（注意）なさいましたか。

〈自由記述〉

1) 床や畳にこぼしたら

A	B	C	無 答
21	17	27	0

2) 食卓の上にこぼしたら

A	B	C	無 答
40	7	18	0

3) 口のまわりや服につけた時

A	B	C	無 答
12	10	28	15

4) 食べ残した時

A	B	C	D	E	無答
22	18	4	19	1	0

☆ 回答は

- A：食量事情の悪い時だけにひろって食べさせる。親が食べた。
 B：捨てて片づけさせる（衛生面でよくないので捨てる。家畜にやる）。
 C：「こぼさないように」「拾いなさい」と言う。（注意したり叱ったりしているが食べたか捨てたか不明）
 D：まずそのようなことはなかった。
 E：注意しなかった。

などに分類された。

5) 好物が出されてその量が少ないと不満を言った時

A	B	C	D	E	無 答
31	19	7	3	1	4

- ☆ A：不満を言うことがなかった。
 平等に分けた。
 B：大きい子にがまんさせた。
 ないのだからしかたがない。
 C：好きなだけ食べさせた。
 他のものをかわりに食べさせた。
 自分のものをあげた。
 D：注意しなかった。
 E：「またつくってあげる」と言った。

7. お子さんは食べ物に好き嫌いがありましたか。

あ る	な い	無 答
15	50	0

1) 嫌いな食べ物

にんじん	ねぎ	大根	しいたけ	ピーマン	なす
7	5	2	2	2	1
ごぼう	牛乳	とろろ	魚	肉	
1	1	1	1	1	

- 2) 嫌いな食べ物がある場合、あなたはどのように対応しておられましたか。

A	B	C	D	E	無答
2	12	0	7	0	5

☆ 複数回答

- A：偏食をしないように調理を工夫した。
 B：「身体に良いから」などと注意した。
 C：一口でも必ず食べさせた。
 D：しいて食べさせなかった。
 E：その他

8. 箸のもち方については

A	B	C	D	E	無答
12	21	5	7	19	1

- A：親を見習わせた。
 B：手をとって教えた。
 C：言葉で説明した。
 D：注意はしなかった。
 E：その他

9. 食事中、テレビをつけていることをどう思いますか。

A	B	無答
21	31	13

- A. 別にかまわない、習慣だから、忙しいのでニュースぐらいみたい、参考になるから。
 B. 食べることがおろそかになる、家族の会話がうすれる、姿勢がくずれる。

10. 当時、食事のしつけについてお宅では

- 1) その程度

きびしい方だった	かなり心がけていた	どちらともいえなかった	あまりしない方だった	全くしなくてもよかった	無答
11	8	17	19	8	2

- 2) 食事のしつけは主に

主人	私	父	母	その他	無答
8	35	2	12	5	3

- ☆ その他の中では「あまりかまわなかった」「誰もしなかった」がある。

D. 食習慣

III. お宅の食習慣についておうかがいします。

1. (年中)行事の日には、特別に食事をつくってあげましたか。

	必ずつくった	時々つくった	どちらともいえなかった	ほとんどつくらなかった	全くつくらなかった	無答
お正月	63	1	0	0	0	1
ひなまつり	56	1	1	3	2	2
お彼岸	60	2	0	1	1	1
子どもの日	36	2	2	5	17	3
お盆	63	0	0	0	1	1
十五夜	59	2	0	0	2	2
クリスマス	1	2	1	0	28	33
七五三	33	7	2	2	18	3
誕生日	20	3	2	8	29	3
その他						33

- ☆ その他では、祭り、七夕、えびす講、お日待ち、十三夜、八十八夜、節分、命日、十日夜、などがあげられる。しかし、つくったか、つくらなかったかは不明。

2. 行事食の意味ないしいわれについて、お子さんに話してあげましたか。

たいてい話した	ほとんど話さなかった	無答
27	34	4

3. お宅には仏壇や神棚、祠などがございましたか。

1) 種類

神棚・仏壇 祠	神棚, 仏壇	神 棚	無 答
23	37	3	2

☆ 上記以外にあるものでは、氏神、大神宮、えびす様、八幡様、山の神、天狗様、おになり様

2) (ある場合)、ごはんなど、毎朝お供えなさいましたか。

毎日 供えた	時々供えた (行事食や 旬のもの)	ほとんど供 えなかった	供えること はまずなか った。	無 答
51	11	0	1	2

供えたわけとしては

a	b	c	d
7	11	13	4

- a. 家の習慣で
- b. 先祖や故人となった身内を偲んで
- c. 神や仏への感謝と家の幸福を願って
- d. その他

3) (同様に一ある場合)お子さんにも供えさせましたか。

供えさせた	供えさせなかった	無 答
19	39	7

4. 食事の「ことわざ」について「御存知のもの」には○を、また「お子さんに話したことのあるものに」には◎を、「御存知ないもの」には／をつけて下さい。

	a	b	c	d	e	f	g
◎	10	2	53	13	11	8	22
○	6	4	11	26	13	7	19
/	49	59	1	26	41	50	24
h	i	j	k	l	m	n	
28	10	1	7	11	6	11	
27	11	15	6	15	9	20	
10	44	49	52	39	50	34	

- a. ご飯を食べながら背伸びをすると、ご飯が腹に入らず背中の方に入って死ぬ。
- b. 肘をついてご飯を食べると地震がくる。
- c. 寝ころんでもものを食べたり、食べてすぐ横になると、牛になる。
- d. 一杓子で茶碗一杯のご飯を盛るな。
- e. 左手でご飯を盛るな。
- f. こぼした飯粒は必ず拾え、さもないと眼がつぶれる。
- g. 朝食に汁をかけて食うと出世しない。
- h. お赤飯に汁をかけて食うと、結婚式や葬式の日に雨(雪)が降る。
- i. 正月の七草粥と15日の小豆粥を吹いて食ってはいけない。田植の時大風が吹く。
- j. 箸から箸で物を受け渡しするな。
- k. 風呂の中でもものを食うと親の死に目に見えない。
- l. 食器を箸でたたくと蛇が入ってくる。
- m. 食器の欠けたものを食膳に出すと客が不幸になる。女はお産が重くなる。
- n. 食事中、立って座席をあちこち移動すると、嫁入り先が決まらない、嫁に行っても腰がすわらない。